史書
#10

かいげんそうずき

快元僧都記

作者:快元（1487-?）

成立:天文元-11年(1532-1542)

解　題

Keyword

- 鶴岡八幡宮
- 北条氏綱
- 「鶴岡平氏綱再興記」
- 「天文記」
- 「小田原天文記」

鶴岡八幡宮相承院の供僧(ぐそう)である快元が、戦国期の天文元年から同11年(1532-1542)の間書き残した日記。北条氏綱の命により実行した同宮社修築工事の次第を中心に、職人たち、北条氏家臣等の動きを詳しく伝える。山内・扇谷両上杉氏や房総里見氏らとの抗争の記事も見える。中世の神社建築史としても貴重な記録とされる。

(写本)『小田原天文記』表紙と巻頭

成立経緯

大永６年(1526)安房の里見実堯(さねたか)は三浦半島に上陸すると玉縄城に迫った。北条軍と激闘の末、鎌倉を掠奪して火を放つと房総へ引き上げたという。このとき東国武士の信奉を集めていた鶴岡八幡宮は炎上、社宇堂塔が灰燼に帰した。そのため小田原北条氏二代氏綱は相模国守護として、鶴岡八幡宮の再建を企図し、鎌倉代官の大道寺盛昌を惣奉行に任じて、天文元年５月大工事の準備に着手した。

このことは同宮の供僧である快元にとって願ってもないことであった。快元はこの年から同11年５月までの10年間、宮社修築の記録を日次に詳しく記したのである。なお同10年以降は記述が極端に少なくなることから、別人による補足か、快元自身の筆になるとしても、後日記憶により書き足したのではないかと推測されている。

作　者

快元は、鶴岡八幡宮二十五坊のうち相承院の供僧で、中納言法印と称した。永正２年(1505)に前職の俊朝から供僧職を継ぎ14世住持となった。以後36年にわたり相承院供僧として会所に加わり、同宮の経営に奔走した。この間同宮焼失の憂き目に会い、氏綱の圧倒的な支援を得て天文の再興を成し遂げた。天文６年(1537)には氏綱の召に従い小田原に行き、駿河出陣の戦勝祈願をしている。また同宮修築の間、氏綱からの各種の質問に応えている。同９年11月念願の正殿遷座が成り、翌年、供僧職を融元に移譲した。なお快元は同15年世田谷八幡宮造営のとき、上棟式の供養導師を勤めた。群書類従本『八幡愚童訓』の奥書に、享禄３年(1532)筆写させた旨署名している。

内　容

鶴岡八幡宮の修築工程は下見、職人たちの調達手配などの準備に始まった。職人の専門は大工、塗師、檜皮師、瓦師、炭焼、絵師、壁師、石切など多種にわたり、番匠と呼ばれる大工は自領内の鎌倉、玉縄、伊豆はもとより奈良、京都からも高い賃銭を払って呼び寄せている。また大鳥居の材料となる巨木が北条氏領内には見つからず、敵地である房総で伐採したものを海上輸送し由比ガ浜から陸揚げした(同５年８月晦日条)。駿州からの材木が花蔵の乱によって整わず到着が遅延すると見え、駿河からも木材が運ばれていたことがわかる(同５年５月10日条)。

氏綱の同宮再建にかける執念は並外れたものであり、両上杉氏や下総足利義明、安房里見氏、さらには武田信虎との抗争の合間を縫ってたびたび上倉(じょうそう：鎌倉に至ること)している。奉行に対し、差配分担を細かく定め日帳を毎日改めるように命じ、違背の場合には改易するとまで言い切っている。快元はその氏綱命の文書を日記にそのまま写した(同３年２月18日条)。氏綱が足利義明を下総小弓に討伐して凱旋したとき、氏綱は八カ国の大将軍になること疑いなし、と称賛している(同７年10月15日条)。また作事慣行の違いによる鎌倉と奈良の番匠同士の諍いの際、仲裁して意見したのは、奉行の一人、玉縄衆太田兵庫助であった(同３年２月14日条)。玉縄衆は両上杉と北武蔵で戦闘中であり、その知行役負担は重くのしかかっていたと考えられる。このほか風水害などさまざまな障害も記述されている。

修築工事は同５年８月の仮殿遷宮を経て、上宮、拝殿、廻廊などより下宮、赤橋、大鳥居までが完成、同９年には念願の正遷宮が実現する。一方、社殿など中心部分とは別に八足門の葺替え、七度行路・両下馬橋の修造、由比ガ浜大鳥居の立替えなどの普請が行われたが、これらの工事は鎌倉町人などの勧進を主体に実行されたといわれ、この事業が民衆から支持と助力を得ていたとされる。同９年11月21日「天晴、風静」下宮で神楽、相撲が献納され、氏綱は神馬、太刀を進献している。午後から読経供養があり夫人方が東桟敷に居並んだ。翌日の落成法事は、氏綱、氏康をはじめ一門衆、大名、京

都奉公衆など正装列座のもとで執り行われ、快元が導師を務め転読、舞楽があった。快元僧都の晴れがましさが伝わってくるようである。

諸儀式も終わり静まった同28日、古河公方足利晴氏に入嫁した氏綱息女(芳春院)が、路次安全を願ってひっそりと参詣しているのが印象的である。

諸　本

本書の原本はすでに失われており、写本が国立公文書館などに伝わっている。群書類従・歴代残闕日記所収本は標題を『快元僧都記』とし翻刻の底本として流布しているが、他本との照合では天文２年の一部を欠き、他にも日付の錯誤が指摘されている。神道大系本は『鶴岡平氏綱再興記』と標題し、国学院大学黒川家旧蔵本を底本としている。ほかに彰考館や尊経閣文庫などに伝存する写本がある。藤沢市文書館翻刻本及び『戦国遺文』に収録されたものは、国立公文書館所蔵本を底本としている。題簽に「天文記」とあったのを消して『快元僧都記』とし、他の写本にない房総関係の記事が見られるという。なお、現在神奈川県立図書館で所蔵している『小田原天文記』は、書写年代は不明だが巻頭部分に他の写本には見られない記述が存在する。

史料本文を読む

＜写本＞

●『小田原天文記』全2冊［K24.7/13/1～2］

＜翻刻本＞

◆「快元僧都記」（『群書類従』第25輯 雑部 巻456［K08/17/1-25］）
◆「快元僧都記」（『神道大系 神社篇20』神道大系編纂会 1979［K17/31/20］）
◆＊「快元僧都記」（『歴代残闕日記』第27巻 黒川春村編 臨川書店 1990）
◆「快元僧都記」（『藤沢市史料集18』藤沢市文書館編1994［K27.52/3/18］）
◆「快元僧都記」（『戦国遺文後北条氏編 補遺編』東京堂出版 2000[K27.7/16]）

史料についてさらに知る－参考文献－

◆下山治久「後北条氏の職人頭須藤左衛門」（『関東戦国史の研究』後北条氏研究会編 名著出版 1980［K24/358］）
◆下村信博「戦国大名後北条氏と鎌倉鶴岡八幡宮再建--天文年間の支配体制」（『日本歴史』(401) 吉川弘文館 1981［Z210.05/3］）
●『戦国期職人の系譜 杉山博博士追悼論集』永原慶二･所理喜夫編 角川書店 1989［K24.7/82］
◆佐藤博信「『快元僧都記』の世界像--戦国期の都市鎌倉の理解のために」（『日本歴史』(523) 吉川弘文館 1991［Z210.05/3］）
◆水藤真「『快元僧都記』に見る鎌倉鶴岡八幡宮再建の諸相」（『中世の社会と武力』福田豊彦編 吉川弘文館 1994［K24/311］）